

松本清張記念館

◆館報◆

2004. 8
第16号

ははあ、じゃ、
ハンドウを回されたな



『遠い接近』カッパノベルス
(昭和47年7月 光文社)

「遠い接近」は

『週刊朝日』昭和四十六年八月六日号から
翌四十七年四月二十一日号まで連載された。

現在入手できる本

松本清張全集 第39巻(文藝春秋)

『遠い接近』 文春文庫(文藝春秋)

目次

- 古代史 講演 シンポジウム…………… 2
- 研究発表会…………… 4
- 展示品紹介…………… 5
- 清張原風景「点描」…………… 5
- みんなの広場…………… 6
- 友の会活動報告…………… 6
- 特別企画展『松本清張の軍隊時代』…………… 7
- 探検！清張記念館…………… 7
- トピックス…………… 8

作品紹介

昭和二十年十月、焼け野原になった広島で、復員してきたばかりの山尾信治は立ちつくしていた。——教育召集令状が届いたのは三年前である。信治は色版画工として独立し、六人の家族を抱え、忙しく働いていた。徴兵検査では第二乙種、すでに三十代になっていたため、令状を手にした驚きと衝撃は大きかった。三月月の教育召集のみで除隊になると思いついたが、そのまま本召集に切り替えとなる。

入隊した信治は「ハンドウを回す」という言葉が、懲らしめを意味する軍隊用語であることを知る。鼓膜に焼き付いた召集時の会話の意味がようやく解る。(軍事教練にはよく出るほうでしたか？……いいえ。……ははあ、じゃ、ハンドウを回されたな。)

——自分の召集は、教練に出なかつたための懲罰なのか。出なかつたのではない、忙しくて出られなかつたのだ。千葉原佐倉、朝鮮の竜山と移動しながら、信治は自分に「ハンドウを回した」男の名を調べはじめ。家族からは東京を離れ疎開したという報告が届き、安心する——広島なら大丈夫だと思つたのだ。

原爆で家族を失つた信治は東京に戻り、かつて内務班で自分を虐めた安川と出会う。誘われるままヤミ商売を手伝ううち、自分の名を「死の召集令状」に書いた男・河島が生きていることを知る。信治に再び復讐心が芽生える。自分が召集されなければ家族を戦火から守れたと信じて。

信治は慎重に練つた計画を実行する。しかし捜査の手は思わぬところから伸びてきた。

(芸芸担当 小野 芳美)

講演

「飛鳥の石造遺物と斉明天皇」 ～酒船石遺跡と益田岩船～

松本さんに初めて直接お目にかかったのは、一九七七年、福岡・博多であった、第一回の朝日・全日空の「邪馬台国シンポジウム」。そのとき松本さんが司会をおやりになつて、出席者は江上波夫先生、井上光貞先生、大林太良さん、九州大学の考古学の教授の岡崎敬さん、それが

古代史

講演・シンポジウム

平成16年3月27日（土）
北九州市立大学 A101教室

企画展「松本清張「火の路」誕生秘話」の開催を記念し、記念館として初めて清張古代史をテーマとした講演とシンポジウムを催しました。誌面の都合で、直木孝次郎先生の講演は冒頭の「松本清張さんの思い出」だけを紹介し、シンポジウムは要約（一部）の紹介にとどめさせていただきます。ともに来年三月末発行予定の研究誌『松本清張研究』第六号に全文掲載の予定です。

ら同志社大学の教授の森浩一さんと、私。いま生きているのは、森さんと私だけになりました。その二年後、朝日新聞の「古代史シンポジウム国家成立の謎」という、やはり松本さんの司会のシンポジウムに出席しました。そのほか、対談で五回、確かお目にかかったと思います。お会いしたときの印象は、大変礼儀正しいと申しますが、大変学者を尊重していただく、そういう感じがいたしました。偉い作家の方は大体そうですね。私は山本有三先生、野上弥生

子先生に親しくしていただきましたが、お二人とも大変謙虚な態度で、こちらが恐縮しました。松本さんもそういう感じでした。

「松本清張と古代」という文章を、學燈社から出している国文学の雑誌の、司馬遼太郎と松本清張さんを取り上げた特集号で書きました。「古代史家としての松本さん」というテーマで書いたのです。歴史というものは、特に資料の少ない古代史の場合は、謎解きの能力、一方からいうと「考証」ということですが、これ

直木 孝次郎

日本古代史。文学博士。
大阪市立大学名誉教授。
昭和18年、京都帝国大学文学部国史学科卒業。
大阪市立大学教授、岡山大学教授、相愛大学教授、甲子園短期大学教授を歴任。
第13期日本学術会議会員。大阪文化賞、和島誠一賞、井上靖文化賞受賞。
主な著書に『日本古代国家の構造』、『日本古代の氏族と天皇』、『飛鳥奈良時代の研究』などがある。

が特に重要な部分を占めると思います。これは、推理小説をもつて一世を風靡された松本さんにとっては得意の分野であります。優れた近世史の歴史家の、岡田章雄という方は、歴史をやる者は推理小説、探偵小説を読むのが役に立つ。アガサ・クリステイとか、ガードナーとか、ヴァン・ダインとか、クロフトとか。推理力を鍛錬し、歴史を研究するのに役に立つと書いておられます。ことにクロフトの作品の主人公はコツコツ足で歩いて真相を突き止めてい

く、いわゆる天才型の探偵ではなくて凡人型の探偵ですね。松本さんの小説に出てくる刑事さんも大体そういう人ですね。

しかし、むろん謎解きだけが歴史ではないので、「社会に対する関心」、言い方を変えますと、「批評精神」、「批判精神」、こういうものがないと、やはり歴史家としては何か塩が足りないと思います。それは一方からいいますと、政治権力との闘いを含んでまいります。松本さんの日本現代史の研究、あるいは「日本の黒



い霧」のようなものでは、政治と社会、社会の矛盾、これを非常に鋭く突いておられます。もう一つ歴史家にとって必要な素質は、私は「構想力」ではないかと思えます。一つの考えによって自分の調べたことをまとめ上げていく能力、これも必要なことです。それにはやはり「想像力」が必要になってくる。これについては、松本さんも非常に大きな能力を発揮しておられます。でなければ、きちっと最後がまとまる長編小説は書けないだろうと思えます。

ただ松本さんの場合は、少し「構成員」といいますか「想像力」が壮大でありすぎて、そこが面白いところなのですが、実証これに伴わずという憾みなきにしもあらず。後で申しますが、私は「火の路」はちよつとそういう点があつて、ゾラスター教と益田岩船を結びつけるのは構想としては面白いのですけれども、実証という点からみると、歴史家を、古代史家を納得させるには足りない点がある。松本さんのような大作家を私のような者が批評するのは恐ろしいのですが、そこが「批評精神」でありますからお許しを願いたいと思います（笑）。

ここで、松本さんの古代史研究の軌跡を簡単に辿ってみますと、最初は、古代の研究者をテーマとする小説をいくつか書かれました。まづ有名なのは、一九五四年に発表された「断碑」であります。これは「承知のように、モデルは奈良県生まれの考古学者で、大学に職を得ることができずに民間で活動した森本六爾です。その研究によって日本の弥生時代の性格が非常にはっきりしてきた。その森本六爾の生涯のクライマックスを辿つたのが「断碑」。「石の骨」というのは、明石原人を発見しながらも、その評価をめぐつていろいろ毀誉褒貶が起つた、あの直良信夫さんを書いたものでございます。

次に書かれたのが古代史に関するエッセイ。さらに進んで研究で、邪馬台国問題を中心にしたのが「古代史疑」です。「遊史疑考」は、後に「史」を古代の「古」に改めて「遊古疑考」とされました。これは主として考古学ですね。その中でも前方後円墳と三角縁神獸鏡の研究が中心であろうかと思えます。それから「古代への探求」、これは日本神話論、日本神話の研究でございます。

そして最後に、邪馬台国、古墳、鏡、神話などの研究の上に立って、推理小説が執筆されます。それが「火の路」であります。

「蘇我氏と日本の古代」

～逆賊の実像を探る～

「司 命 水谷 千秋 (龍谷大学講師・松本清張研究奨励事業若手入選者)

「ハナヲ」加藤 謙吉 (成城大学講師)

平林 章仁 (大和高田市立片塩中学校教諭)

亀井 輝郎 (福岡教育大学教授)

辰巳 和弘 (同志社大学教授)



【水谷 千秋】

松本清張の「古代史疑」に始まって、晩年の「清張通史」全五巻に至る古代史への追求とその史実への肉薄ぶりは、学界へ真剣に投げかけられた研究であった。

中でも、特に関心を寄せたのが蘇我氏である。蘇我氏は、日本の歴史において一貫して逆賊として扱われてきた。その淵源は「日本書紀」の記述にある。蘇我本宗家を滅ぼした「大化の改新」を正当化するため、逆賊として描写したのである。しかしその実像は、日本古代史における最大の豪族であり、大和政権の発展に最も寄与した豪族である。松本清張はその重要性を早くから見抜き、「敏達朝から皇極朝までの七十年の政治は、すべて蘇我氏の執政によって行われたといつてもいい。(中略)まさに馬子は天皇代行であった。むしろ「事実上の天皇」に近かった」と言っていた。

今では、多くの研究者がこの氏族の重要性を指摘している。しかし一般には、今もなお逆賊というイメージが強いのも否定できない。こ

の点、私も専門の研究者も一般の方々の誤解を正していく責務があると考えている。

【加藤 謙吉】

―蘇我氏の出自とその台頭―

蘇我氏の出自をめぐって、「蘇我氏渡来人説」を歴史的に無理があると退けた上で、その前身を論じられた。『日本書紀』の推古三十二年十月条「馬子が葛城郡」といふ、葛城地方の天皇の直轄地を自分に与えてほしいと推古天皇に奏上して拒否されたこと、同皇極元年是年条「蝦夷が、葛城の高宮に己が祖廟を立てて八僧の儺を舞わせた」の記述は、基本的に歴史的事実を伝えており、蘇我氏の出身地を葛城地方に求め、五世紀に滅亡した葛城氏の流れをくむ氏族と理解することができ

る。雄略天皇の軍事的な専制王権を支えた勢力は、大伴氏、物部氏などの軍事的な伴造であった。継体朝末には磐井の反乱や王位継承をめぐる紛糾も起き、大伴、物部の二大勢力の間にも亀裂が生じてくる。その中で、政治的に低迷していた大和の在地型土豪が息を吹き返す。蘇我氏はその代表として急速に台頭し、葛城氏の正統な後継者として、オオマエツキミのポストに就いた豪族ではなかったかと考えている。

【平林 章仁】

―推古朝の蘇我氏―

推古天皇と、厩戸皇子(聖徳太子)、蘇我馬子の三人の関係で推古朝の政治を見た場合、私は、第一期、第二期に分けて考える。「日本書紀」の推古天皇紀を見ると、十五年二月甲午条の記事以前と、十八年十月丙申、丁酉条以後に大きな差が出てくるのである。

第一期で、馬子の主体的な活動は、法興寺(飛鳥寺)の造営ぐらいである。対して、聖徳太子の関連記事は二十一条ほどあり、ほとんどは十五年以前に集中している。ところが第二期

に入ると、聖徳太子の活動は沈滞化するのに対し、馬子の活動が活発になってくる。注目されるのは、一つは人日の儀礼(推古紀二十年正月七日条)である。これは君臣関係を確認する儀礼で、崇峻天皇の殺害で推古朝の前半期、政治的謹慎状況にあった馬子の復権をはかる目的で催された。もう一つは推古天皇の母、堅塩媛を檜隈陵(欽明天皇陵)に改葬した記事(推古紀二十年二月庚午条)である。堅塩媛を大后、皇后に準じた地位に引き上げる政治的な効果があり、蘇我氏の地位を非常に高めるものであったと考えられる。

【亀井 輝郎】

―舒明・皇極朝の蘇我氏―

舒明・皇極朝は東アジアが激動する時代である。推古朝の遣隋使が伴った留学僧、留学生は、隋・唐という世界帝国の興亡をその渦中で体験し、帰国後に入鹿や鎌足や中大兄皇子のような次代を担う若い連中に国際政治の激動を伝えた。

馬子が死ぬと、蘇我氏内部で族長の地位継承及び皇位継承をめぐる、軋轢と対立が起る。馬子の兄弟の境部臣摩理勢と子の蝦夷の対立。推古天皇の後継として当然血縁の山背大兄を支持していいのに、蝦夷は田村皇子(舒明天皇)を推し、摩理勢は山背を推している。田村は蘇我の血を引かないが、蝦夷の妹の法堤郎媛と婚姻関係を通じて古人大兄が生まれていた。

上宮王家(山背大兄)滅亡事件で誰が攻めに行ったのか。『藤氏家伝』の「諸王子」の中には、孝徳『補闕記』のほか、恐らく中大兄もいたであろう。蘇我氏の本家と中大兄などの舒明系の間には、上宮王家をめぐる共通の利害があった。国際情勢に対する認識においても、入鹿と中大兄には恐らく共通するものがあったろう。律令体制へ向かう産みの苦しみの時代、「近代国家」という目的地は共通に持ちながら

も、中大兄と入鹿とは、そのアプローチの道筋に相違するところがあつたといふべきであろう。

【辰巳 和弘】

―蘇我氏と飛鳥の遺跡―

飛鳥には古墳時代後期最大の前方後円墳、五条野丸山古墳(全長三〇メートル)がある。その被葬者を欽明天皇とみる考えが大勢を占めるなか、蘇我稲目の墓として築かれた円墳(方墳の可能性あり)を、欽明妃の堅塩媛(稲目の娘)を葬るにあたり巨大な前方後円墳に築き直したという新説を発表。

同古墳の後円部に築かれた横穴式石室は全長二八・四メートルの大石室で、玄室には二基の家形石棺を納める。石室は羨道の長さが二〇メートルを超え、玄室長の二・五倍近い長大さで、しかも前半分の一〇余メートルの天井石を一段高く架けるのも特異である。

一般に横穴式石室は、奥壁前面の中央が円丘(後円)部の中心となるよう設計されるが、同古墳では後円部の墳丘が大きすぎる。当初は直径四〇メートル程度の円墳として築かれた古墳に、羨道を付加し、前方後円形の古墳に築き直したとみられる。

馬子は石舞台古墳に、蝦夷と入鹿は双墓に葬られたと推考できる。稲目の墓を丸山古墳に比定するのとは無理がなし。堅塩媛は父の墓をさらに荘厳した後に合葬され、やがて馬子大臣の主導により檜隈大陵(梅山古墳)に改葬されることになる。



第10回 松本清張研究会 研究発表会

と き 平成16年6月26日
と ころ 明治大学 リバティータワー

「松本清張研究会」は、松本清張記念館の開館を機に平成10年末発足しました。研究会には、大学等研究機関の研究者から個人の愛読者まで、多彩な会員が全国から参加しています。これまで、年2回の研究発表会を中心に活動してきましたが、最近では発表会が各紙でも紹介され、会員以外からも注目されるようになってきました。今回は節目となる第10回研究発表会の内容の一部を紹介します。

講演 清張ミステリーにおける東京

川本三郎（文芸評論家）



川本 三郎氏

はじめて清張作品に触れたのは、中学生のときに読んだ「点と線」である。中学生の間でも大変な評判となり、貪り読み、なかには実際に東京駅まで出かけた友人もいた。当時私は阿佐ヶ谷に住んでおり、小説中に自分の住む阿佐ヶ谷が出てくることに、初めての体験として強烈な印象を受けた。「点と線」を読むと、今は既になくなってしまった昭和三十年代の東京の風景が鮮やかに蘇ってくる。犯人の安田がアリバイをつくるために最初に女性を誘ったのが有楽町の「レバンテ」。レバンテはかつて新聞社が集中した有楽町のなかで新聞記者の溜まり場となった「アレストラン、いかにも朝日新聞に勤めていた清張らしい舞台のひとつである。そして最も三十年代の東京を感じさせるのが、「都電」である。捜査を担当する警視庁の三原警部補は思考し、考えをまとめるために都電に乗るのである。警視庁から新宿行きの都電に乗り考えるさまは、都電の好きな自分にとっても非常に懐かしく、また絶好の場面設定である。都電はそのほか、「声」さらに「砂の器」などにも登場し、清張作品の



講演風景

ひとつのキーワードともいえる。「砂の器」では、今西刑事は当時、場末ともいえる板橋の滝野川に住んでおり、また微笑ましい光景として奥さんと鶯のトゲヌキ地蔵にでかける場面が描かれている。その一方で犯人和賀英良は田園調布に住んでいる。清張さんの頭の中には、東京という土地を捉えるとき常にこうした階層の図式があったのだろう。清張作品にはその舞台として多くの東京が登場してはいるが、その多くが西東京である。清張自身、上京後長く練馬に住んでおり、作品のなかでも西へ西へと拡大していく東京の風景を、作品の舞台、背景として実に「見事に使っている」。清張は明らかに西東京を意識しており、これは清張が西の九州から上京してきたことと大きな関連があると思う。いずれにしても、清張が描く東京は、今よりも東京と地方の格差がまだまだ大きな時代であり、「霧の旗」「空白の意匠」などのように地方の人間から見た東京であったように思う。

研究発表 日本近代の欲望と犯罪『砂の器』を中心に

綾目 広治（ノートルダム清心女子大学教授）

「砂の器」は、刑事今西を中心に物語は進んでいくが、犯罪者として登場する評論家・関川重雄、作曲家・和賀英良の反俗主義と表裏一体となった立身出世主義が描かれているのも事実である。「断碑」「落差」など多くの清張作品に登場する主人公は、立身出世をエトースとしてその内面に強く持つている。そして、立身出世のための無理から、あるいは過去を隠すために犯罪へと結びついていくが、「砂の器」はその代表格といえる。「砂の器」がこれほど読まれる理由の一つに、近代日本の立身出世主義を正面から捉えたことにあると思う。多くの読者が自己の半生を振り返るとき、やはり自分の立身出世主義と結びつくのではないか。近代日本社会の立身出世主義の全構造は、急速な発展を遂げる日本型資本主義の内面的動力の役割を果たし、明治以降の人々の生き方を牽引した。近代文学においても立身出世主義は、二葉亭四迷の「浮雲」や国木田独步、石川啄木にもみることが出来る。この立身出世主義の内容は、一部学歴エリートの高学歴・教養主義とそれ以外の大衆の修養主義である。文学における修養主義の代表は吉川英治の「宮本武蔵」である。日本は能力主義の社会であるという話は、大幅に割り引いて考える必要があり、学歴エリートは学歴エリートの家庭



綾目 広治氏

で、非学歴エリートは非学歴エリートの家庭で再生産される。もっとも、「砂の器」に登場する関川も和賀も非学歴エリートの家庭に生まれるが、それを何とか隠蔽し、這い上がって学歴エリートの中に入り込んでくる。二人は、一方でブルジョア的なものや出世主義を批判しながら、他方で出世主義の道にしがみつこうとする強烈な矛盾を抱えている。そしてその無理、落差から犯罪を犯してしまうのである。一徳総中流時代といわれた一九八〇年代以降、立身出世主義はエトースとしては失われてきた。しかし、今年「砂の器」はテレビ化された。バブル経済崩壊後、日本は新たな階級社会に突入したともいわれ、特に若者の多くが、その実感を強く持つてきていると思う。そうであるならば「砂の器」は決して過去の作品ではなく、今日の社会に十分受け入れられる作品といえる。

社員写真帳

朝日新聞社によると「社員写真帳」の創刊は大正時代に遡る。社内に残存するいちばん古い「写真帳」は大正七年のもので、それ以前にあったかは定かではない。以降朝日新聞創刊から数えて節目の年に発行されてきたらしい。本来、記念・記録的な意味のものが定例化し、五年おきの発行で続いた「写真帳」は、平成七年を最後に姿を消した。

記念館に展示している昭和十九年の「社員写真帳」には、西部本社・広告部の職員として松本清張が小さく収まっている。前年、囑託から職員にならばかりだった。写真にどこことなく違和感を憶えるのは、トレードマークである豊かな髪の毛がないせいだろう。

「写真帳」が発行される前の年、清張は教育召集で三ヶ月間職場を離れた。その後再度の召集によって十九年の六月から敗戦まで軍隊生活を送った。時局を反映して他の社員も坊主頭や軍服で写っている者が目立つ。



軍色が強くなった。

（中略）職場からは若い年齢順に同僚が戦場に出て行った。部長はいわゆる部会の劈頭に彼らの名前を

読み上げて武運長久を祈りはじめた。（半生の記）

清張もまた例外ではなかった。三十四歳、第二種合格の清張に、突然届いた召集令状は非情に映った。

私は新聞社に入るまで、安定した生活を得るために自分なりの苦勞をした。収入の有利を棄てて社員になつたのも、戦争の進行が必ず私を兵隊に狩り出すだろうと予想したからだった。（中略）いま兵隊に取られてみると、最低の生活費ながら、とにかく新聞社から家族に給料が行っていることは安心だった。この保障を失うことは許されなかった。（「半生の記」）

結果的に清張の選択は正しく、家族に「安定」をもたらした。裏を返すと、それだけ切実な不安を抱えていたことになる。「写真帳」は、一社員としての証明であると同時に、戦地に向かう清張が頼みにした「保障」というものを静かに物語っている。

（学芸担当 柳原 暁子）



清張原風景

点描

「少年時代には親の溺愛から、十六歳頃からは家計の補助に、三十歳近くからは家庭と両親の世話で身動きできなかった。」

清張の父・峯太郎は新聞の政治記事に強い関心をもち、また講談本をよく読み歴史にも詳しくあった。幼い頃をふり返り、「冬の夜、足を炬燵に突込んで父の手枕で聞く太閤記などがどれくらい面白かったか分らない」といふ。

しかし、職にはめぐまれません、仲買、飲食店など職業を転々と変え、生活が安定することとはなかった。

「そのころ父の生活が少しくよくなっていった。法律の知識が少しあるので裁判所によく出入りをした。示談屋みたいなことをやっていたのではなからうか。とにかく、朝早く母の手伝いで餅を搗くと、ぞろりとした絹物に着替え、柁目の下駄をはき、裁判所



裁判所・米穀取引所



旧裁判所→

↓米穀取引所（戦災で消失）



1 旧裁判所前の道（現在）

に出かけた。（中略）また、米穀取引所があったところで、空米相場もしていた。そのせいか、天気を見ることは巧かった。」

当時の裁判所は真船町にあり、山口地方裁判所下関支部と下関区裁判所が入っていた。建物は戦災を免れ、現裁判所が上田中町に新築移転する昭和三十五年ごろまであったといわれる。跡地には山口県下関総合庁舎が建っている。

下関米穀取引所は、文化二年（一八〇五）長府藩主の認可によって設立された米会所にはじまるといわれる。明治三十五年（一九〇二）、東南部町に三階建て煉瓦づくりの取引所が落成したが、昭和十四年の米穀配給統制法の制定により閉鎖された。

（中野 吉明）

文中の引用はすべて「半生の記」から。写真は『しものせきなつかしの写真集（下関市史）』から

松本清張記念館は今年開館6周年を迎えます。
 これまで来館者の皆様からいただいたアンケートの中には、
 当記念館の展示や内装に対するご意見もお寄せいただきました。
 今回はその中の一部をご紹介します。

松本清張記念館のここに感激！

- ・はじめに全著作の表紙が展示してあるのがよかった。ひとつの芸術作品のようだ。清張氏の本をもっとよんでみようと思う。
 (20代・神奈川・女)
- ・「年表」「書庫のある家」に圧倒されていたのですが、今日初めて「点と線」をじっくり拝見し、今実写ではとてもここまでの味を出せないと脱帽しました。どれだけあるかわからない清張作品の映像をすべて収録し、いつでも観られるようにして頂ければと思います(現存しているものの全てです)。(30代・長崎・男)
- ・アイデアを凝らしてよくこんな記念館をつくれたものだと感心する。積年の(来館の)念願かなってとても嬉しい。もう少し清張さんのなま身のエピソードや写真などを見せてもらえたらよかった。今後がんばって下さい。
 (50代・徳島・女)
- ・清張先生のご自宅がスッポリ館内に移設されているのにビックリしました。先生の思索の残影に向き合えたように感じます。
 (40代・大阪・男)
- ・松本清張の事は全く知らなかったが、ごく初心者にも分かりやすかったので時間があつたらまた来たい。
 (20代・佐賀・男)
- ・初めて来ましたがあまり美しいのでびっくり。次回ゆっくりと出なおしたい！
 (70代・北九州・女)
- ・たいへんすばらしい。特に年譜は社会背景とあわせて清張氏の軌跡が伺える。個人文学館としては至上のひとつといえる。
 (30代・東京・男)
- ・館内がとても清潔で気持ち良かったです。ゆっくり過ごせ小倉での思い出となりました。是非又来館したいです。清張の作品ももう一度色々と読みたいです。
 (40代・大阪・女)
- ・立派な施設に負けない位展示の方法に感激いたしました。
 (60代・熊本・男)
- ・非常に良かった。思った以上の感動を受けた。(60代・広島・男)

このコーナーでは、アンケートなどでお寄せいただいた意見等をご紹介します。清張や作品に対する思い、エピソードなど何でも結構です。皆さんの「声」を是非、記念館までお寄せください。
 ※アンケートは館内にも置いてあります。

友の会 活動報告

● 第6回 清張サロン

[5月20日(木)：参加者10名]



文芸評論家・安間隆次先生を講師にお迎えして、「砂の器」をテーマに清張サロンを実施しました。参加者がそれぞれ感想や意見を述べ、先生がそれに対して解説やコメントを加えていく形式で、和やかな雰囲気の中、活発な意見交換が行われました。

● 文学散歩

[4月23日(金)：参加者33名]

佐賀県の吉野ヶ里歴史公園を訪問しました。公園内には弥生時代の遺構が復元されており、古代史の研究にも熱心だった清張は、遺跡の発掘調査中にここを訪れたことがあります。その後、映画「張込み」のロケ隊が宿泊した旅館「松川屋」に移動し食事をしました。松川屋の女将さんからは撮影当時のエピソードを紹介していただきました。最後に訪問した村岡総本舗では羊羹資料館を見学し、その後村岡安廣社長から清張にまつわる思い出話を語っていただきました。



吉野ヶ里歴史公園



羊羹資料館

会員募集中

ただいま16年度新規会員を募集中です。松本清張記念館友の会では清張ゆかりの地の見学や読書会・講演会等の開催、会報の発行など多彩な事業を展開しています。
 8月から翌年7月までを1会計年度とし、年会費3,000円となっています。この機会に是非どうぞ。

友の会入会のお申し込みは… TEL. 093-582-2761 松本清張記念館友の会事務局まで

特別企画展

松本清張の軍隊時代 ——朝鮮の風景

清張のアルバムには、二枚だけ兵隊姿の写真が残されています。二等兵の襟章から、昭和19年頃に撮影されたと思われます。

清張が初めて軍服に袖を通したのは、昭和18年の教育召集の時でした。この教育召集は三ヵ月で解除となりますが、翌19年に再度召集令状が届き、敗戦まで朝鮮半島で過ごします。軍隊社会は、清張にとってあらゆる意味で新鮮なものでした。また、朝鮮での生活は初めての海外体験でもありました(といっても当時朝鮮半島は日本に併合されていました)。

合計しても僅か一年半ほどの期間ですが、この間に清張が受けた印象は大きく、体験や見聞きした事柄は、のちに多くの小説に活かされています。今回の企画展では、清張が当時見た風景の再現を試み、軍隊時代が清張文学に及ぼした影響を探りました。



軍服姿の松本清張

- 開催期間
平成16年8月1日(日)～10月31日(日)
- 会場
松本清張記念館 2階ホール
- 入場料
常設展示観覧料を含む



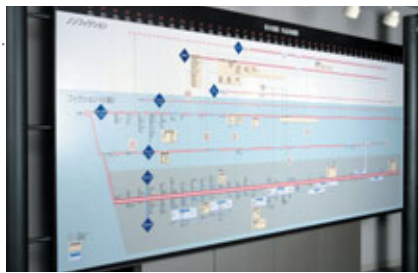
現在もソウル市内に残る、旧日本軍の使用した建物



清張らが井邑で駐留した、農学校の建物(1945年頃)

きよしとハルコの 探検! 清張記念館

1F 作品系統図の巻



きよし それにしても……。

ハルコ すごいわねえ。バスか電車の路線図みたい。

きよし それにしても前半の密度ときたら。
作家一本にしぼった昭和31年の作品数は…33本!
小説ってこんなに書けるものなの?

ハルコ 「人間の智能的労働の限界に関する実験」と大宅
壮一に評されるはずよね。

きよし う～ん、だんだんこのパネルは清張の脳内の思考回路そのものに見えてきたぞ。
傑作がまた次のアイデアを生み、新たな傑作へと引き継がれていく。それが量だけじゃない、幅にもつながっているんだ、きっと。

ハルコ 本人にとってみたら結構必然のつながりだったのかも。一つ用事が増えると一つ何かを忘れる誰かさんとは大違い。

きよし ま、まだまだこれからだよ…。
清張だってデビューは42歳からじゃないか。

ハルコ うふふ! じゃあせめて清張と同じように若いうちは一所懸命に仕事しないとね。
がんばって!

ジャンルの広さ、活躍期間、作品量。そのつながりを一枚のパネルに凝縮。どこに着目しても「さすが清張」。ご自分の目で、清張という作家の一生の仕事というものを体感してみてください。
「作品系統図」は1F常設展示室1の入り口近くです。

平成16年度 中学生・高校生

読書感想文 コンクール

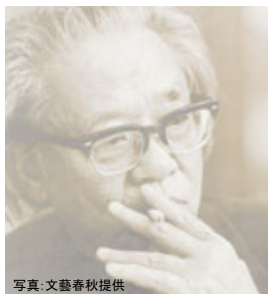


写真:文藝春秋提供

昨年に引き続き、清張作品の読書感想文を、中学生・高校生を対象に募集します。

若年層に、より多くの作品に親しんで欲しい、表現力を学び豊かな心を身に付けてもらいたいという願いから、このコンクールは始まりました。そして、これからを担う若者たちに、探求の人・松本清張の精神が伝えられていけば幸いです。

- 応募対象 全国の中学生・高校生
- 課題図書 中学生・高校生ともに下記から1作品
「砂の器」「恋情」(新潮文庫『西郷礼』)
「遭難」(新潮文庫『黒い画集』)

■ 応募方法

- 中学生、高校生ともに1200～2000字程度の読書感想文を書き、応募用紙に添えて提出してください。
- 手書き、ワープロどちらでも結構です。ただし全体の字数がわかるよう応募用紙に1行の字数×行数を記入してください。
- 原稿は自作で未発表のものに限ります。なお応募原稿はお返しいたしませんので、必要な場合はコピーをおとりください。

■ 応募締切 平成16年11月12日(金) ※消印有効

■ 応募先 〒803-0813 福岡県北九州市小倉北区内2-3
松本清張記念館 感想文コンクール係

■ 発表

審査結果は、12月下旬頃、本人と学校に通知します。
最優秀賞、優秀賞の受賞者には、表彰式を行います。
なお、入選の結果や受賞作品を記念館刊行物等に掲載することがあります。
その場合、著作権は松本清張記念館に帰属します。

■ 賞品 (受賞人数等、変更の場合もあります。)

- 最優秀賞(1人) 《モンブラン》万年筆
- 優秀賞(中学の部…1人)(高校の部…1人) 《モンブラン》文具(未定)
- 佳作(中学の部…3人)(高校の部…3人) 記念館グッズと図書券

● 編集後記 ●

今年の暑さはまた格別。じりじり焼けた空気が、夜になっても冷えることはありません。

今回の館報は、ほんの一瞬でも暑さを忘れさせる内容になっていたでしょうか? (中野 吉明)



イラスト:山藤 章二

編集・発行

松本清張記念館

〒803-0813
北九州市小倉北区内2番3号
TEL 093(582)2761
FAX 093(562)2303
http://www.kid.ne.jp/seicho
制作 (株)エディックス

- 開館時間 午前9:30～午後6:00 (入館は午後5:30まで)
- 休館日 年末(12月29日～12月31日)
- 観覧料 一般/500円(400円) 中・高生/300円(240円)
小学生/200円(160円) ()は30人以上の団体
- アクセス JR: 小倉駅から徒歩15分 西小倉駅から徒歩5分
小倉駅からは100円バスをご利用いただくと便利です(小倉城第二下車)
車: 北九州都市高速、大手町ランプより5分

松本清張記念館

第6回

松本清張研究奨励事業 入選企画決定

第6回は、松本清張の幅広い活動に対して、様々な角度からの研究企画(15点)の応募があった。

最終選考には文学研究3点、現代史、考古学各1点の合計5点が残ったが、今回は全体的に研究企画のレベルが高く、初の3点入選となった。日本・中国・韓国における清張研究がそろい、松本清張研究が国際化へ踏み出した画期的な年になった。

企画名 モダニスト松本清張
— マスメディアとの相互関連性をめぐる研究

氏名 (代表/共同研究2人)
宗像 和重 早稲田大学教授

奨励金 90万円

企画名 日本の探偵小説・推理小説と中国
— その中国における受容と意味

氏名 (代表/共同研究5人)
王 成 中国首都師範大学助教授

奨励金 80万円

企画名 松本清張と金聖鐘
— 日韓の戦後探偵小説比較研究

氏名 李 建志 県立広島女子大学助教授

奨励金 36万円

第7回

松本清張研究奨励事業 募集中

～平成17年3月31日まで

※詳しくは記念館までお問い合わせください。

